

熱田神社物語



この紙芝居は子供用に溝口公民館が製作したものを『溝口郷づくり会』がアレンジしたものです。

※詳細をお知りになりたい方は長谷公民館にお問合せください(TEL:0265-98-2009)。

<参考図書抄>

- 伊那谷長谷村の民俗(編纂・発行 長谷村文化財専門委員会)
- 伊那谷長谷村の文化財(編纂・発行 長谷村文化財専門委員会)
- 長谷村誌(編纂・発行 長谷村誌刊行委員会)



1. 宝の玉を持つ竜

熱田神社は、伊那日光とも呼ばれ、国の重要文化財です。

このお宮は今から250年ほど前に、溝口村の人々の浄財だけで作られました(当時150戸)。

力みなぎる竜や獅子、楽しげに遊ぶ唐子(からこ)などの彫刻は実に見事で、先人の匠(たくみ)たちの思いが今も息づいています。

ところで皆さん、二十数体ある竜の彫り物の中に宝の玉を持った竜がいますので、探し当ててお参りしてみてください。きっと健康で幸せになるといわれていますから...



2. 神社と大蛇とのかかわり

熱田神社の始まりは太古の昔へとさかのぼります。

日本武尊(ヤマトタケルノミコト)が日本の各地を平定した頃のことです。南アルプスを越え、ここより少し奥の戸台の河原に降りたとき、いきなり大蛇が襲いかかりました。思わず後ずさりして、草薙の剣を抜き大蛇の前に振りかざしました。すると、目もくらむような閃光がはしり大蛇からおびただしい血が飛び散り、河原一面を赤く染めました。今でもそこは赤河原と呼ばれています。

タケルは退治した大蛇の頭をかつぎ河原をくぐりました。溝口村まで来て桑の大木の下に大蛇の頭を埋め、小さな祠(ほこら)を作りました。

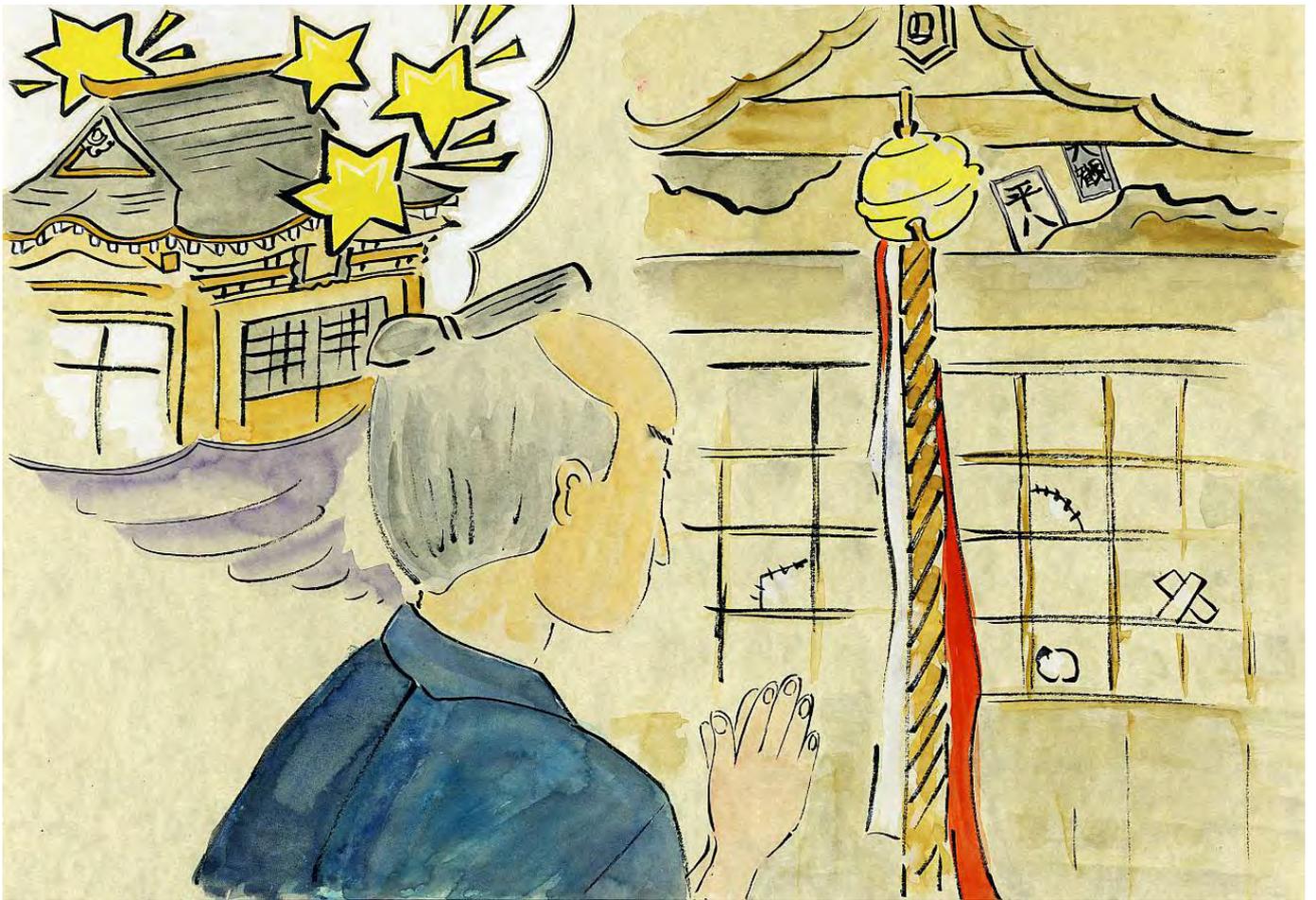
村人は、大蛇を倒してくれたタケルに手を合わせ、祠(神社)にお参りするようになりました。



3. 子供のころの善八(熱田神社建立の棟梁)

さて、時は流れ、溝口村に高見善八(後に池上と改姓)という子供がいました。生まれながらに体が弱く、目も患っていた善八は、小さい頃から母に連れられて熱心に熱田神社にお参りしました。

「丈夫で目がよく見えるようになったら、
きっと立派な大工になって恩返しします」と、善八は願い続けました。



4. 宮大工の修行に精をだす善八

そんな願いが通じたのか、身体も目もすっかり良くなり、武蔵の国(今の埼玉県)の立派な宮大工の棟梁のもとへ弟子入りしました。そして、いつか恩返しできるようにと大工の修行に精をだしました。



5. 困った村人たち(はやり病、^{ききん}飢饉)

その頃、溝口村は三峰川の大水害や、はやり病で、苦しい日々が続いていました。お宮の屋根は腐り、雨漏りの修繕もされないありさまでした。

「この災いはお宮を粗末にしたせいかもしれねえ」

「きっとお怒りになっているにちげえねえ」

うわさは広がり、困った村人は、庄屋さんのところに集まりました。話し合いは三日三晩続きました。

そして、皆で費用を出し合い改修することに決めました。棟梁に池上善八(旧姓高見)を呼んだのはもちろんです。



6. 木の中から大蛇の骨

「高遠藩の財政も厳しくて、藩からの援助など、
到底望めそうにないなあ」

「御用材は境内のご神木のケヤキを使うことに
しよう」

村人はケヤキの大木を切り倒しました。するとどう
でしょう、大きな音とともに倒れたケヤキの根元から
大蛇の骨が現れました。昔、ヤマトタケルノミコトが
退治した大蛇の魂が木に宿っていたのです。

そこで、ご神木の根元に小さな祠(ほこら=たか
おかみ神社)をつくり、蛇骨様とよんでお祀りし、工
事の無事を祈りました。



7. 立派な彫り物

大工の棟梁を引き受けた善八は、上州(今の群馬県)の左甚五郎と呼ばれた関口文次郎を迎え、工事に取りかかりました。

「今までにこんなすごい木を彫ったことがない。この木には魂が宿っている。

気持ちを込めてノミをふるうと、見事な竜や唐子の形が仕上がる。これは大蛇のご神木の力に違いない。

それにここは不思議な気の力が感じられる。」

それに後押しされるように、二人はそれぞれの仕事にますます力をいれました。



8. 平成5年国重要文化財指定

5年の月日をかけて熱田神社の改修工事が終わりました。ときに宝暦13年(1763年)のことでした。

間口10尺6寸(約3.3m)、奥行9尺6寸(約2.9m)の三間社作りで、規模は小さいながらも日光の流れを汲む特殊な手法と、名工による彫刻で出来上がった貴重な文化財です。

熱田神社は溝口村の人々のよりどころとなり、農作業の合間にお参りをし、子供達は竜の彫物の周りを駆け回りました。

平成5年(1993年)に国の重要文化財に指定されました。